

言語と思考——学問研究のために

犬塚 博彦

0. はじめに

本稿は、筆者が勤務校で担当しております「英語学の世界Ⅱ」という講義科目において、平成18年1月16日と1月23日の2回にわたって「学問をすること」というテーマで行なった連続講義の内容をもとにその一部を論考の形でまとめたものです。私たちがものを考えるときにまさにそれなしではあり得ないのが言葉なのですが、本論考では、言語と思考の問題を中心のテーマに据えつつ、西洋における学問的思考法の要に位置づけられる「ロゴス(logos)」と、ロゴスにもとにした学問上の基礎語彙のその概念的な把握ということをベースにして話を展開していきたいと思います。なお、本誌の読者の中には、学問研究をまさにこれから進めていこうとしている大学院生や学部生もいることとされますので、本稿では実際の講義の雰囲気や伝わるようにと配慮した文体になっておりますことを最初にお断りしておきたいと思います。

1. 学問とは真理の探究

学問をすることということ真理を探究することであると言われます。「真理」という日本語に相当する言葉は、西洋においてはその学問の源流となる古代ギリシアにさかのぼり、ギリシア語で‘*alētheia*’と言います。‘*alētheia*’という語には「蔽われていないもの」とか「忘れていないこと」という意味がそのもとにあって、これは字義的にみれば「隠蔽」とか「忘却」を意味する‘*lēthe*’に否定や欠如を表わす接頭辞‘*a-*’が加わったものであります。つまり、もともと在って隠されていたものがその蔽い(cover)が取り除かれて(dis-)あらわにされるということが真理という言葉の原義となっています。

2. ロゴス(logos)

ところで、学問の世界における真理は、知的な思考活動を通して初めて捉えられるものなのですが、思考活動、つまりものを考えるという時にそれなしではあり得ないのが言葉です。日本語の「言葉」に対応する語はギリシア語では‘*logos*’と言いますが、‘*logos*’という語は「拾い集める」を意味する動詞‘*legein*’の名詞形であって、「ばらばらに散らばった事実を筋道・秩序にしたがって取りまとめること」¹⁾という意味がそのもとにあります。つまり、ものを

考えるという場合、頭の中にあつて初めはまだぼんやりとしていて言葉にもならないような星雲状のものを取りまとめ一つひとつ言葉に直していくこと、その言葉に直したものがロゴスであるということになります。そしてロゴスとロゴスの関係に配慮しながら、筋道を立てて言葉を重ねていくという営みの中に論理(logic)なるものが生まれてくるのですが、このあたりのところを以下において考察してみることにしたいと思います。

3. ものを考えるということ——思考の根本形式について

私たちが言葉によつてものを考えるという場合、その最も小さな単位としては、ものそのものをそのままの形で捉えてそれに語をあてて受け止めるという段階があります。次に、語と語をいくつか組み合わせて文の形にして考えるという段階があります。さらに、文と文を組み合わせて、ある内容が言えるとすれば別のこういうことも言えるはずだというような推理を働かせて考える段階もあります。言語によつて表現されたものとしてこれを捉えればそれぞれ「名辞」「命題」「推論」ということになりますが、その奥にある思考の単位として捉えれば「概念」「判断」「推理」がこれにあたります。つまり、「ものを考える」ということを考える場合の鍵になる言葉が、思考の根本形式である「概念」「判断」「推理」であつて、それぞれの作用によつて思考の対象となるものそのものの本質を認識するということが可能となってくるのです。では以下の節において、概念、判断、推理のそれぞれについてその内容を考察してみたいと思います。

3. 1. 概念／名辞

「概念」という言葉は英語の‘concept’に対応する語ですが、‘concept’はラテン語の‘conceptus’という語に由来します。‘conceptus’は動詞‘concipio’（「一緒につかむ・総括する」という意味）の名詞形であつて「一つにして掴まれたもの」という意味がそのもとにあります。つまり、「複数の事物や事象から共通の特徴を取り出し、それらを包括的・概括的に捉える思考の単位」²⁾であり「事物の本質的な特徴をとらえる思考形式」³⁾であると言うことができます。いま「複数の事物や事象から共通の特徴を取り出し」ということを言いましたが、これは言葉を換えれば「抽象」ということであり、抽象化の作用がはたしているということはその反面で、それ以外の性質は度外視(捨象)されているという意味を内に含んでいることがわかります。

さて、概念とは事物の本質的な特徴をとらえる思考形式であるということを見ましたが、概念を構成する要素の観点からこれを見ますと、概念とは「言葉のも

つ意味内容を明瞭に、その適用される範囲を明確に定めたもの」⁴⁾であると定義されます。言葉のもつ意味内容のことを「内包」(intension)、その適用される事物の範囲のことを「外延」(extension)と言います。

ところで「概念」という言葉と意味的に非常に関わりの深い言葉として「定義」という言葉があります。定義は、学問研究においては、ロゴスを用い、ロゴスに基づいて論を展開していくときの出発点に位置づけられるものであります。

「定義」という言葉は英語の‘definition’に対応する語なのですが、語源的にはラテン語の‘definitio’に由来します。定義は、「言葉や物事を明確に規定し説明することを目的とした手続き」⁵⁾として用いられるのでありますが、その内容は、一般的に言えば「意味をもった言葉や記号、つまり用語、概念について、その概念の内容とその適用される範囲が定められること」⁶⁾とされており、アリストテレスは『トピカ』第1巻第5章において「定義は類と種差から成り立つ」と論じており、定義の対象となるのは「本質」の部分であるとしています。

ここでいま「本質」という言葉がでてきましたが、この言葉はさきに概念とは何かということについて触れたときにも、概念とは事物の本質的な特徴をとらえる思考形式であるということでも「本質」という言葉がでてまいりました。これらのことから、ものごとの「本質」を把握するということが学問的な思考を進めていく上での大事な出発点であるということがわかります。「本質」という言葉は英語の‘essence’に対応する語であります、その語源はラテン語の‘essentia’に由来します。‘essentia’という語はその内部に‘esse’という部分を含んでいるのですが、‘esse’はラテン語では「～である」という意味のちょうど英語の‘be’動詞にあたる語になります。この‘essentia’に対応するギリシア語は‘ousia’と言いますが、この‘ousia’という言葉は、アリストテレスの『形而上学』によりますと「何であるかということ(to ti ēn einai)」という定義がなされていることから、変数を用いてこれを言い表わしますと、「本質」とは「XをXとして成り立たせているXの特質」であるということが出来ます。別の言葉で言えば「それなしではありえないまさにそれ」が本質であるということが出来ます。この点を踏まえてさきに触れた「定義」という言葉を捉え直してみますと、「何であるかということのまさにその内容とその範囲が明確に定められること」と位置づけることが出来ます。

3. 2. 判断／命題

前節においては、思考の根本形式としてその最も小さな単位である概念について考察してきましたが、本節では、概念と概念が組み合わさった形としてのより

大きな単位のものについて考えてみたいと思います。これは言語の単位としてみれば「命題(proposition)」, 思考の単位としてみれば「判断(judgment)」と言われるもので、判断とは「概念と概念が結合したもの」のことを言います。判断は基本的な形式としては「主語—述語」の形をとります。例えば「人間は動物である」という判断においては、「人間」は判断の対象となる「主語」であり、「動物」は規定である「客語」であり、「である」は両者の関係を表わす「連辞(copula)」であり、この場合の判断とは、主語・客語・連辞という3つの要素から成り立っていることがわかります⁷⁾。

判断の主語について言えば、特定のものが対象となるか全部のものが対象となるかによって個体判断と普遍判断に区分されます。個体判断としては例えば「彼は正直である」というような判断のことを言い、普遍判断とは例えば「人間は理性を有する」というような判断のことを言います。また判断の対象が具体的か抽象的かによって具体判断と抽象判断に区分されます。例えば「この花は美しい」と言えばこれは具体判断でありますし、「2は素数である」と言えば抽象判断になります⁸⁾。

また、判断の主語について述べられる部分が客語にあたるのですが、主語と客語の結びつき方によって存在判断、属性判断、関係判断の3種類に区分されます。このうち存在判断とは存在の規定を表わす判断であって、例えば「机がある」というような判断がこれにあたります。また、属性判断とは例えば「この机は円い」というように対象の性質を表わす判断のことを言います。そして関係判断には「この机はあの机より小さい」という判断が例としてあげられます。ここで言う存在(being)とは、ある時間・ある場所において知覚の対象になり得る客観的ものを表わし、属性(attribute)とは事物の性質やその特徴、また、関係(relation)とは二つ以上の思考の対象が何らかの点で統一的にとらえることができることを言います。

3. 3. 推理／推論

さて本章ではこれまで思考の基本的な形式として概念と判断について概観してきましたが、次に思考の単位および言語の単位として「推理・推論(inference)」について考察してみたいと思います。

推理・推論とは、アリストテレスの『分析論前書』第1巻第1章に基づきますと「なんらかの判断あるいは命題を前提として、そこからある結論を導き出すこと」であると定義されます⁹⁾。つまりこれは「一つ以上の真なる、または真と仮定された判断(→前提)から他の判断(→結論)が真であることを明らかにする思考

作用」¹⁰⁾であると言えます。

推理をすすめる道筋としては、演繹的推理と帰納的推理に二分することができます。演繹(deduction)と帰納(induction)は思考の手続きとしていずれも重要なものです。このうち演繹については「一つ以上の命題から、それを前提として、経験にたよらず、もっぱら論理の規則にもとづいて、必然的な結論を導き出す思考の手続き」¹¹⁾であって、三段論法がこれにあたります。またこれと対になる思考の手続きが帰納であります。帰納とは「個々の特殊な事実から一般的結論を導き出す推理」¹²⁾のことを言います。

次に、推論の種類としては、これを直接推論と間接推論に分けることができます。このうち直接推論(immediate inference)は、アリストテレスの『分析論前書』14によりますと、「真偽があらかじめ知られている一つの判断から直接に、他の新たな判断の真偽を導き出す」とことと定義されています。例えば直接推論の例を一つ挙げるとしますと、「すべての人は死ぬ」という判断から「ある人は死ぬ」という内容を導き出すことができます。これに対して間接推論(mediate inference)は、三段論法(syllogism)の名称で知られているところのものでありまして、これは「二つの判断から、他の一つの新たな判断を導き出す」¹³⁾ものと定義されます。例えば、「すべての動物は死すべきものである」という判断と「すべての人間は動物である」という判断から、「すべての人間は死すべきものである」という内容を導き出すことができるのがこれにあたります。

4. 学問的思考における道具としての概念とその概念的把握について

前章では、思考とは概念・判断・推理の作用であり、この作用によって対象となるものそのものの本質を認識していくということを見てまいりました。このうち、思考の道具としての概念とその概念的把握ということが学問的な思考の出発点において最も重要なものであると位置づけられます。

一般的に言って、対象となるものが一つだけの場合には、それがどのようなものであるかという事物のあり方を把握することが、認識にあたっての主な着眼点になります。「<どのような>という問いに対応する事物のあり方」¹⁴⁾のことをラテン語では‘qualitatem’という語で言い表わしますが、この語は‘qualis’(of what kind)が派生したもので、英語の‘quality’の語源にもなっているものであり、日本語では「質」という言葉をこれにあてています。

一方、対象となるものが複数ある場合には、あるものとあるものがそれぞれどのようなものであるかということに加えて、両者の「関係(relation)」ということがその認識のもう一つの中心になってきます。関係とは「二つ以上の思考の対

象を何らかの点で統一的にとらえることができる場合」¹⁵⁾に見出されるものです。

いま、「質」「関係」という言葉ができましたが、これらはアリストテレスが『カテゴリー論』の第4章において挙げている事物の根本的・一般的なあり方を示す10のカテゴリーの中に含まれるものです。

さて、概念どうしの関係というものを考えてみますと、さまざまな捉え方がありますが、まずその一つにその包括度応じて上位概念と下位概念に区別されます。下位概念に対する上位概念のことを「類概念(generic concept)」と言い、上位概念に対する下位概念のことを「種概念(specific concept)」と言います。この両者つまり類概念と種概念との関係は相対的なものであります。同一の類概念に属するさまざまな種概念を区別する特有の性質のことを「種差(specific difference)」と言います。

この他に概念どうしの関係をあらわすものとしては、相対概念・矛盾概念。反対概念などがあります。相対概念の例としては「原因と結果」「目的と手段」がこれに相当します。矛盾概念については例えば「動と静」「生と死」のように内容上の矛盾をもつものもあれば、「動と不動」のように形式上の矛盾をもつものとがあります。反対概念は「白と黒」「善と悪」などが例として挙げられますが、「白でも黒でもないもの」とか「善でも悪でもないもの」というように常に第三の状態が考えられるものがここに分類されます。いずれの場合もそれぞれの要素が組みになって現われることにその特徴があり、思考の道具として概念を用いる場合には概念どうしの関係を組みとして捉えることが重要であると言えるのです。

5. ここまでのまとめ

本論考では学問研究における言語と思考の諸側面について考察をしてきました。初めに「学問とは真理の探究である」という命題をその出発点に位置づけました。「真理」の原語‘alētheia’には「蔽われていないもの」という意味が含まれることから、その蔽い(cover)をとり外していく(dis-)ことがまさに真理を探究することであるということを見ました。真理を探究すること、つまり学問をする際にそれなしではあり得ないのが言葉つまりロゴス(logos)であり、ロゴスに基づいてものを考える際に概念・判断・推理が関係してきますが、この中でも知的な思考活動の道具としてまさにその要となるのが概念であるということを見ました。そして思考の道具として概念を用いる場合には概念どうしの関係を組みとして捉えることが重要であるということ考察してまいりました。

註

- 1) 廣松渉他編 『岩波哲学・思想事典』(東京:岩波書店, 1998) 1739.
- 2) 廣松他編(1998) 209.
- 3) 栗田賢三他編 『岩波哲学小辞典』(東京:岩波書店, 1979) 30.
- 4) 村治能就編 『哲学用語辞典』(東京:東京堂出版, 1974) 61.
- 5) 廣松他編(1998) 1103.
- 6) 村治編(1974) 288.
- 7) 村治編(1974) 338-339.
- 8) 村治編(1974) 338-339.
- 9) 村治編(1974) 228.
- 10) 栗田他編(1979) 30.
- 11) 栗田他編(1979) 23.
- 12) 栗田他編(1979) 52.
- 13) 村治編(1974) 228.
- 14) 栗田他編(1979) 94.
- 15) 栗田他編(1979) 43.

参考文献

- アリストテレス 『カテゴリー論』(山本光雄訳), 『分析論前書』(井上忠訳)
[アリストテレス全集1], 東京:岩波書店, 1971.
- アリストテレス 『トピカ』(村治能就訳) [アリストテレス全集2], 東京:岩波書店, 1970.
- 栗田賢三他編 『岩波哲学小辞典』, 東京:岩波書店, 1979.
- 犬塚博彦 「言語を研究すること(1)―高津春繁著『言語学概論』におけるテキスト分析を通して―」『盛岡大学紀要』第16号(1997):11-18.
- 犬塚博彦 「学問をすること(1)―盛岡大学英語英米文学会会報』第11号(2000):58-59.
- 犬塚博彦 「学問を語る言葉―高津春繁『言語学概論』のテキスト分析から―」『岩手大学英語教育論集』第4号(2002):36-46.
- 寺澤芳雄編 『英語語源辞典』, 東京:研究社, 1997.
- 林達夫他編 『哲学事典』, 東京:平凡社, 1993.
- 廣松渉他編 『岩波哲学・思想事典』, 東京:岩波書店, 1998.
- 村治能就編 『哲学用語辞典』, 東京:東京堂出版, 1974.

(岩手大学教育学部英語教育講座)